

事業名称	新宿から発信する「コロナ以後の新しい博物館」プロジェクト		
実行委員会	新宿から発信する「コロナ以後の新しい博物館」プロジェクト実行委員会		
中核館	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館		
	住所	〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1	
	TEL	03-5286-3920	FAX 03-5273-4398
	ホームページ	https://www.waseda.jp/enpaku/	
構成団体	新宿区文化観光産業部文化観光課、新宿区教育委員会事務局教育支援課、公益財団法人新宿未来創造財団、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館双栴会(ボランティア組織)、新宿ワールドミュージアム、新宿観光振興協会		
事業開始時点の課題分析	<p>本事業の中核となる早稲田大学坪内博士記念演劇博物館は、1928年10月に坪内逍遙を中心に各界有志の協賛により設立され、以来、日本はもとより、世界各地の演劇・映像に関する貴重な資料を収集・保管・展示してきた。近年はこれらのアーカイブを積極的に公開することで、文化資源の共有化を大胆に図っている。1987年には、建物が新宿区有形文化財（建造物）の指定を受け、アジアで唯一の演劇専門総合博物館として、演劇・映像文化の普及に貢献するとともに、国際的な研究拠点としても重要な役割を果たし、海外の研究・教育機関や博物館とも積極的に交流を図ってきた。2017年には、前年の「あゝ新宿 スペクタクルとしての都市」展の成功を踏まえ、株式会社新宿高野による会場の無償提供を得て、新宿区や新宿観光振興協会、新宿歴史博物館等、地域の行政や諸機関との緊密な連携を背景とした同実行委員会の主催により、特別展「あゝ新宿 アングラ×ストリート×ジャズ展」を開催し、新宿区内のみならず国内外から多数の来場者を集めた。これら「あゝ新宿」展やイベントを機に、演劇博物館は新宿の文化振興の中核としての自覚を強め、新宿区や区内の諸機関との連携を強化し、新宿区の文化振興と国際発信を牽引してきた。2019年には「コドモノミライー現代演劇とこどもたち」展を、新宿区、新宿区教育委員会、公益社団法人日本児童青少年演劇協会、一般社団法人日本演劇教育連盟等、様々な機関、協会、劇団と提携して開催した。本実行委員会はまた、過去10年以上にわたり文化庁博物館支援事業により、地域の活性化や観光振興、教育や人材育成に寄与してきた。</p> <p>2020年度、新型コロナウイルスの感染拡大はこれまでの博物館事業や舞台芸術事業に大きなダメージを与え、訪れる場所としての博物館や劇場は危機に瀕している。この未曾有の危機を打開するためには、従来のスタイルのみに縛られることなく、新しい博物館や文化振興のあり方を構築していく必要がある。そこで本事業は、資料の電子化やデジタルアーカイブの公開に早くから取り組む等、新しい技術を食欲に導入してきた演劇博物館の実績やノウハウを最大限に活かし、オンライン配信等を活用することにより、新しいかたちの文化振興を積極的に推進していく。それにより、新宿区内のオンライン化が遅れている博物館・美術館や文化施設に一つの新しいモデルを提示し、これまで演劇博物館を利用してきた地域住民を中心とする一般の人びとや学生たちに文化を送り届け、さらに演劇映像専門博物館として、新宿区内の演劇文化を活性化することに寄与したい。これは、これまで構築してきた交流の場としての博物館の意義を維持しつつも、コロナ禍の中で生まれた可能性をよりポジティブに捉え、新たな機能を地域との共働の中で作り上げていく事業である。</p>		

	<p>グローバル化が押し進められる現代において、固有の場所からオンラインによって到達しうる「世界」へと伸びやかに展開する将来的な地域モデルを獲得する試みとしても本事業は位置付けられる。新型コロナウイルスは様々な「分断」を顕在化させた。このような危機を乗り越えるために、地域において緊密なネットワークの構築を図り、そこから再び積極的に発信していく。こうした循環を通して、国内外の人びとと共に考え、共感を深める場を創出することを目指す。</p>
<p>事業目的</p>	<p>本事業の目的は、中核となる演劇博物館が長年にわたって蓄積してきた膨大な文化資源や文化発信のノウハウに加え、新型コロナウイルスの感染拡大にいち早く反応した実績を活用することにより、オンライン配信等も積極的に取り入れながら、コロナ禍における新たな博物館像を確立すること、それにより国内外で高く評価され、「海外に発信すべき日本のブランド力」としても認知されている日本の演劇・映像文化を、周辺地域内の博物館等と連携しつつ地域と共働によって、新宿から広く国内外に向けて発信することである。困難な状況下でも地域文化の活性化を図り、演劇・映像文化全体の底上げを狙う点に特色がある。</p> <p>まずは、新宿区およびその周辺に居住する児童・生徒・学生・外国人を含めた地域住民らに、古典芸能から現代演劇、映像にいたるまで、新宿区の博物館から発信する多様な文化に触れてもらうことによって、新型コロナウイルスの感染拡大によって冷え込んだ文化的関心を喚起する。また、地域の文化を活性化するとともに、外国人向けのオンライン情報の多言語対応を充実させ、文化財本来の魅力や価値を分かりやすく伝えられるような環境を整備する。オンラインでは、日本の演劇・映像文化の多様かつ普遍的な魅力を国内外に広く発信しながら、地域への関心を喚起することを目指す。これにより、将来的なインバウンド観光促進への素地を醸成するとともに、区内の観光振興施策とも連携し、アフターコロナを見据えて地域振興・観光振興にも大きく貢献したい。また、こうした多彩な事業内容と形態によって、コロナ禍において文化的に疎外されがちな高齢者や障がい者、外国人を取り残さない文化事業を展開することも本事業の重要な目的である。</p> <p>演劇博物館は、新型コロナウイルス発生以後、いち早くその状況に反応し、中止公演のチラシ等を収集しオンライン展示を行ってきた。また、2020年文化庁文化芸術収益力強化事業に採択された寺田倉庫株式会社「緊急舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業（EPAD）」の一環として、演劇・伝統芸能・舞踊の3分野の公演映像約1,300本のメタデータ及び、その上演記録やフライヤー等のデジタル資料を総合的に検索することができる特設サイト「Japan Digital Theatre Archives」を開設した。本事業ではこのような実績を最大限に活用し、在宅の人びとも演劇文化への関心を維持・喚起するとともに危機的な舞台芸術を活性化するための座談会やトークショーを、オンライン配信を中心に行う。</p> <p>なお、事業の実施にあたっては、「劇場都市」を標榜し、演劇・映画文化の推進に力を入れている豊島区等、演劇博物館を中核とした新宿区の博物館群を中心とする近隣地区の文化施設と連携することによって、地域の文化施設・発信拠点をつなぐ、演劇・映像文化を核とした地域振興・観光振興を長期的に継続するためのネットワークを構築する。加えて、近隣の地域内の博物館等とも連携して各機関ホームページにリンクを掲載する等、オンライン・ネットワークの構築も図り、地域内での有機的な相乗効果を狙う。さらには、コロナ以後をも見据えつつ、演劇・映像文化による地域振興および観光振興、地域文化の</p>

事業概要	<p>国際発信と国際交流、さらに中核が大学博物館であることの利点を活かし、人材の育成を通じて、文化芸術立国の実現に資することを旨とする。</p> <p>本事業は、演劇博物館を中核として、新宿区、新宿観光振興協会、新宿区未来創造財団をはじめとして、新宿の行政・観光・文化を担う博物館を中心とする文化的主要機関のメンバーからなる実行委員会を組織し、2020年に世界が直面した未曾有のコロナ危機を受け止めつつ、その間に生まれたオンライン等の様々な可能性を積極的に取り入れることで、コロナ以後における地域の博物館の役割を再定義するものである。新宿から地域の博物館の新たな役割を構築し、その成果を国内外に広く発信するため、次の事業を行った。</p> <p>1. 「アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援事業」では、障がいをもった小学生から高校生までの児童・生徒を対象とし、都内の特別支援学校と協力して、観賞会およびワークショップを実施した。自ら映画館に足を運んで鑑賞する機会が少ない障がい者、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、より一層芸術文化に触れる機会を奪われた障がい者に、無声映画と活動写真弁士のパフォーマンスを通して、日本独自の映画文化に触れてもらった。また、他の博物館、特に近隣地域内の博物館における実施例を参考にすることによって、以上の事業を円滑に進めていくためのポイントをあらかじめ押さえてから実施した。</p> <p>2. 「多言語展示解説のオンライン化によるグローバル展開」では、これまで実施してきた展示解説の多言語化サービス充実事業の実績を活かし、移動が制限される感染拡大状況を受け、オンライン上での展示解説にも力を入れることで、コロナ禍を経てもなお、その活動を持続、発展させた。他館所属の委員より各館の多言語化状況についてヒアリングするとともに、演劇博物館の多言語化事業計画についてご意見を伺って実施した。訪日・在日のみならず広く外国人にとっても親切で分かりやすい見学環境を整備し、地域の枠を越えた潜在的な需要層の関心を掘り起こし、将来的な訪問者数の増加につなげることが目的であった。オンライン上の多言語化によって、国際的な枠組みに地域文化を位置付けることで、地域の観光振興と外国人の日本文化理解の深化に貢献し得たものとする。</p> <p>3. 「ユニークベニューとしての演劇博物館から地域へ——多様な演劇・映像文化資源の還元事業」では、座談会等を開催することで、地域とのより緊密な共働を実現し、留学生を含む学生等の若い世代や在日外国人を含む地域住民への演劇・映像文化の普及と浸透を図った。また、新宿区有形文化財である演劇博物館の貴重な所蔵資料を活用することで、新宿区が有する演劇文化の多様性を広く発信し、演劇・映像文化による地域コミュニティの形成を促進するとともに、地域および国内の博物館の機能強化を推進した。なお、新宿区内の博物館等にチラシの配架やホームページ上での告知等の協力を仰ぎ、広報面での連携を図って実施した。</p> <p>(2) 「名作シナリオを楽しもう」事業は、昨年、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に合わせてNHK大河ドラマ「いだてん」を取りあげて座談会を開催する予定であったが、オリンピック・パラリンピック延期にともない、今年度に延期されたものである。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に鑑み、オンライン開催を視野に入れて関係者と調整を行った。しかしながら、オリンピック・パラリンピックの開催が確定するまで時間がかかったために登壇者の調整が難しく、また、「いだてん」はオリンピック関係であることから通常のドラマよりも権利関係が複雑で、オンラインイベントへの映像使用許可を取得することができなかったことにより、予定通りの開催が困難になった。コロナ禍が収束してからの対面開催の可能性も視野に入れて様子を見ていたが、新型コロナウ</p>
------	--

	<p>ウイルス感染症が収束せず、また、東京 2020 オリンピック・パラリンピック閉幕から時間が経過しオリンピック・パラリンピックを文化芸術の面から盛り上げるという当初の目的が果たせないと判断したことにより、開催を見送ることに決定した。</p> <p>4. 「コロナ禍における博物館機能の積極的拡充——舞台芸術資料の保存と発信」では、シンポジウム等を通じて、コロナ禍における演劇／コロナ以後の演劇のあり方を広く議論する環境を構築した。劇場文化は、人が集まる都市という環境において育まれてきた。コロナと演劇を語ることで、本実行委員会を構成する各団体・機関が位置する新宿区を中心とする東京という都市空間が、パンデミック下に担いうる機能を検証し、そこで創出される文化の役割等を再定義したのである。また、デジタル化による演劇の記録・保管の観点から考察することで、コロナ禍以降、議論が活発化してきている舞台芸術のアーカイブという問題を考察した。</p> <p>近代市民社会とともに発展してきた劇場文化が遭遇した未曾有の危機に都市文化がいかに対応しうるのかを参加者とともに考え、デジタル化により都市に紐づけられてきた演劇の時間と空間を再考し、地域から未来に向けて提言する。</p> <p>以上の事業を通して、2020 年に世界が直面した未曾有の危機においても、そこで生まれた可能性を掘り上げ、コロナ以後の生活を見据えて博物館機能の積極的な拡充を目指すことで、他の地域のモデル事業となることを目指している。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>1. アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援事業 (1) アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の無声映画鑑賞支援事業 ①アウトリーチ型ワークショップ「無声映画 出張体験教室」の実施 ②事前打合せ・実施準備</p> <p>2. 多言語展示解説のオンライン化によるグローバル展開 (1) オンラインによる展覧会紹介の多言語サービス事業 ①展覧会内容を紹介したオンライン・コンテンツの多言語化 ②事前打合せ・開催準備 ③ホームページ等における成果発信</p> <p>3. ユニークベニューとしての演劇博物館から地域へ——多様な演劇・映像文化資源の還元事業 (1) 演劇文化を通じた日本文化発信事業 ①イベント「リーディング新派 in エンパク」の開催 ②事前打合せ・開催準備 ③地域広報・ホームページ等での情報発信 ④アンケートの実施 ⑤ホームページ等における成果発信</p> <p>4. コロナ禍における博物館機能の積極的拡充——舞台芸術資料の保存と発信 (1) コロナ禍下での日本演劇および都市文化の検証事業 ①オンラインシンポジウム「コロナ時代の都市文化と演劇」の開催 ②事前打合せ・開催準備 ③地域広報・ホームページ等での情報発信 ④アンケートの実施 ⑤ホームページ等における成果発信 (2) これからの舞台芸術アーカイブの検証事業</p>

	<p>①舞台芸術アーカイブと検索サイトの役割をめぐる座談会の開催</p> <p>②事前打合せ・開催準備</p> <p>③地域広報・ホームページ等での情報発信</p> <p>④アンケートの実施</p> <p>⑤レポート作成とホームページ等における成果発信</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>1. アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援事業</p> <p>(1) アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の無声映画鑑賞支援事業では、新型コロナウイルス感染症流行に伴う休校などの影響により学校行事が削減され、文化とふれあう機会が減ったこともたちに対し質の高い文化芸術を鑑賞・体験する機会を提供することができた。無声映画体験の機会提供に加え、参加者に活動写真弁士・楽士の魅力、無声映画の可能性を理解してもらうことができた。</p> <p>2. 多言語展示解説のオンライン化によるグローバル展開</p> <p>(1) オンラインによる展覧会紹介の多言語サービス事業では、演劇博物館ホームページ内に設けた企画展・特別展のオンライン展覧会の英語・中国語（簡体字/繁体字）・韓国語版を作成して公開した。米国、豪州、英国などの英語圏から、シンガポール、韓国、中国（台湾・香港を含む）のアジア諸国に加え、オランダ、イタリア、スウェーデン、フランスなどからウェブページを閲覧されており、当館のオンライン展覧会が、グローバルな興味の対象になっていることが明らかとなった。</p> <p>3. ユニークベニューとしての演劇博物館から地域へ——多様な演劇・映像文化資源の還元事業</p> <p>(1) 演劇文化を通じた日本文化発信事業では、秋季企画展「新派 SHIMPA——アヴァンギャルド演劇の水脈」の関連公演として「リーディング新派 in エンパク『十三夜』」を開催した。感染対策を十分におこなって、約1年ぶりに有観客でのイベントを実施した。樋口一葉原作『十三夜』を当代屈指の配役による「朗読」という形態で上演した。なお、本イベントは、当館のYouTubeで音声配信した。元々ラジオドラマとして書かれた新派古典の『十三夜』を現代にいかす方法であり、研究と創作が交差する貴重な成果となった。</p> <p>4. コロナ禍における博物館機能の積極的拡充——舞台芸術資料の保存と発信</p> <p>(1) コロナ禍下での日本演劇および都市文化の検証事業では、春季企画展「Lost in Pandemic——失われた演劇と新たな表現の地平」関連プログラムとして、オンラインシンポジウム「コロナ時代の都市文化と演劇」を開催した。疫禍の時代を生きる私たちが、演劇のみならず、さまざまな領域において今後の状況を検討していくために、他分野の経験や知見を共有し、結集することで真の意味での「新しい日常」を考えるための方途を思索していく必要性和重要性が明確になり、そうしたプラットフォームとして当館が機能することも示し得たことは、非常に有意義な成果であった。なお、本シンポジウムは開催後もアーカイブ配信を行い、本事業の広範な発信を継続している。</p> <p>(2) これからの舞台芸術アーカイブの検証事業では、オンラインイベント「『Japan Digital Theatre Archives (JDTA)』からひろがる、舞台芸術アーカイブの未来」を開催した。舞台制作者の多くは、アーカイブの有効性や可能性を潜在的には認識しているものの、体力的にアーカイブには手がかけられないという実情などが改めて浮き彫りにされた。しかし、このコロナ禍を契機にアーカイブの可能性は大きく広がっていることも同時に指摘され、今後、プラットフォームとしてのアーカイブの存在がさらに重要度を増すという現状も明らかにされた。イベントで得られた成果を元に、演劇博物館では、JDTA 拡</p>

充のためのデジタルデータ収集をはじめとし、デジタルアーカイブの発展に取り組む計画である。

やむなく中止とした事業もあるものの、開催したすべての事業において、コロナ禍における文化の発信源としてめざましい成果をあげることができたと自負している。これまで構築してきた交流の場としての博物館の意義を維持しつつも、コロナ禍の中で生まれた可能性をよりポジティブに捉え、新たな機能を地域との共働の中で作り上げていくことに成功したといえよう。また本事業の成功によって、新宿区から世界に発信する演劇映像文化の発信拠点が、当館を中心として形成されつつある。今後もコロナ以後をも見据えた演劇・映像文化による地域振興および観光振興、地域文化の国際発信と国際交流、さらに中核が大学博物館であることの利点を活かした、人材の育成を通じた、文化芸術立国の実現に資することを目指す所存である。

【事業実績】

1. アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援事業

(1) アウトリーチ型ワークショップによる障がい者の無声映画鑑賞支援事業

①アウトリーチ型ワークショップ「無声映画 出張体験教室」の実施

障がいを持つ子どもを対象に、都立の特別支援学校2校で実施、計48名が参加した。コロナ禍においても第一線で活躍する活動写真弁士・楽士を派遣することで、観劇の機会が限られた特別支援学校の子どもたちに弁士と楽士のパフォーマンスを披露できた。無声アニメーション作品『お伽噺 日本一 桃太郎』を上映しながら、実際に子どもたちが弁士・楽士を体験するワークショップを実施し、日本の伝統的な映像文化のおもしろさを十分に伝えられた。



■参加者の声

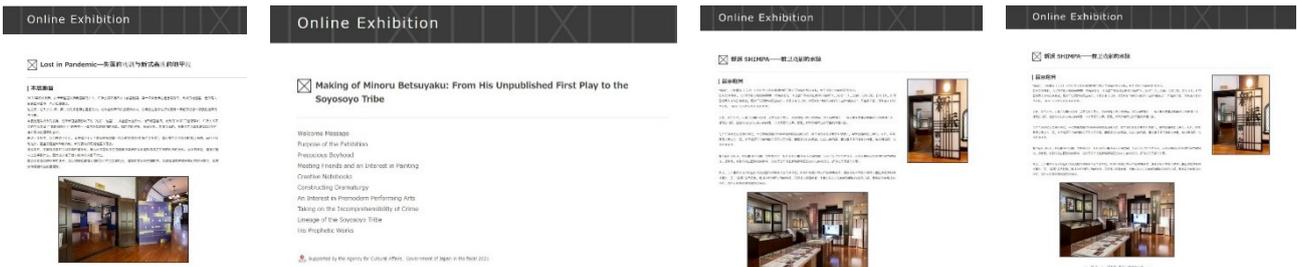
「桃太郎に合わせて楽器を鳴らして楽しかった」「生演奏最高です」「コロナ禍でも今まで体験したことがない文化に触れ、体験することができた素晴らしい学習活動となりました」

2. 多言語展示解説のオンライン化によるグローバル展開

(1) オンラインによる展覧会紹介の多言語サービス事業

①展覧会内容を紹介したオンライン・コンテンツの多言語化

コロナ禍により移動が制限される感染拡大状況を受け、外国人向けのオンライン展覧会として多言語での展示解説を行うことで、訪日・在日のみならず広く外国人にとっても親切で分かりやすい見学環境が整備できた。地域の枠を越えた潜在的な需要層の関心を掘り起こし、将来的な訪問者数の増加につながることを狙いとした。オンライン上の多言語化によって、国際的な枠組みに地域文化を位置付けることで、地域の観光振興と外国人の日本文化理解の深化に貢献することができた。



3. ユニークベニューとしての演劇博物館から地域へ——多様な演劇・映像文化資源の還元事業

(1) 演劇文化を通じた日本文化発信事業

①イベント「リーディング新派 in エンパク」の開催

新型コロナウイルスの感染対策を十分におこなって、約1年ぶりに有観客でのイベントを実施した。当日は収容人数最大に近い128名の来場があった。樋口一葉原作『十三夜』を当代屈指の配役による「朗読」という形態で上演した。なお、本イベントは、当館のYouTubeで音声配信した。元々ラジオドラマとして書かれた新派古典の『十三夜』を現代にいかす方法であり、研究と創作が交差する貴重な成果となった。

■参加者の声

「朗読劇は何度か拝見しましたが、今回ほど心に響いたのは初めてです。感動しました」「素晴らしい会場で、コロナ対策も万全、安心して見られた」「初めての新派でしたが楽しかったです」



■ 新聞記事など掲載

- ・ 高田馬場経済新聞 <https://takadanobaba.keizai.biz/headline/803/>

4. コロナ禍における博物館機能の積極的拡充——舞台芸術資料の保存と発信

(1) コロナ禍下での日本演劇および都市文化の検証事業

① オンラインシンポジウム「コロナ時代の都市文化と演劇」の開催

疫禍の時代を生きる私たちが、演劇のみならず、さまざまな領域において今後の状況を検討していくために、他分野の経験や知見を共有し、結集することで真の意味での「新しい日常」を考えるための方途を思索していく必要性和重要性が明確になり、そうしたプラットフォームとして当館が機能しうることも示し得たことは、非常に有意義な成果であった。本シンポジウムは開催後もアーカイブ配信を行い、本事業の広範な発信を継続して行っている。



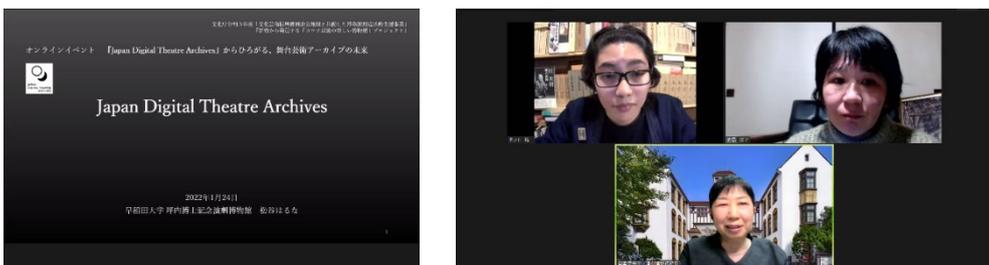
■ 参加者の声

「それぞれ専門・立場の異なる先生方の対話がとても刺激的でした」「感染症と演劇を含む文化との関りについて興味深い多様な議論が聞けて有意義でした」

(2) これからの舞台芸術アーカイブの検証事業

① 舞台芸術アーカイブと検索サイトの役割をめぐる座談会の開催

舞台制作の最前線の現場で活躍される成島洋子氏（SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術局長）と木ノ下裕一氏（木ノ下歌舞伎主宰）の両名を招き、舞台芸術アーカイブの未来像について広く意見交換を交わす機会となった。舞台制作者の多くは、アーカイブの有効性や可能性を潜在的には認識しているものの、体力的にアーカイブには手がかけられないという実情などが改めて浮き彫りにされた。しかし、このコロナ禍を契機にアーカイブの可能性は大きく広がっていることも同時に指摘され、今後、プラットフォームとしてのアーカイブの存在がさらに重要度を増すという現状も明らかになるなど実りのある場となった。



■ 参加者の声

「演劇のアーカイブをなぜ残すのかが明確になり、さらにその活用方法は広げることができるのがわかり、有意義だった」「参加者の質問にたいして登壇者三人それぞれの立場から建設的な意見が出され、ライブの醍醐味を感じた」